

広島地方裁判所御中

伊方原発運転差止等請求事件本案訴訟  
2020年7月1日第19回口頭弁論期日

## 原告意見陳述 要旨

(第1陣原告) 意見陳述者 綱崎 健太

意見陳述の機会を頂きました綱崎健太と申します。本日は誠にありがとうございます。

私が何故、伊方発電所の運転差し止めを求めるのか、ご説明致します。

私の祖母は、75年前の8月6日午前8時15分頃、宇品二丁目で配給の列に並んでいました。飛行機の音が聞こえたので空を見上げると、落下傘が降りてくるのが見えたそうです。とっさに不安を覚えた祖母は自宅へ向かって走り出しました。その直後強烈な光と爆風を浴び、祖母はその場に倒れ込みました。気を失ったか失っていないのかは定かではありません。

そのあと御幸橋のたもとまで歩いた祖母は、この世の地獄を見ます。しかし、ヒロシマの地獄は決して目にみえるそれだけではありませんでした。

放射線被曝の被害は広島街に暗い影を落としました。どれだけ復興しようとも、個人のDNAに刻みつけられた傷は消えなかったからです。

しかしその不安は口に出しても虚しいだけの悲鳴、とでも言いましょうか、身内に迷惑をかける、として、多くの人が沈黙を選ばざるを得ませんでした。祖母も、自身の放射線被曝については私に対して一切何も語らぬままこの世を去りました。

それでも私の家族は放射線被曝に害があることを知っています。

チェルノブイリ原発事故の当時、私は幼稚園児でしたが、周りの大人達が「雨に濡れると頭が禿げるから雨に濡れるな」と言っていたことを覚えています。言葉にすれば趣味の悪いジョークのようにも聞こえますが、広島の人達は遠く離れた当時ソ連の西にある原発事故に警戒していたのです。

広島市民の多くは、ヒロシマの体験として、放射線被曝が人体に害を及ぼすことを知っています。この町には、大きな声で語られてこなかった、集団疎開から帰ってきた人達をも含めた放射線被曝の被害があるからです。そのほとんどは75年という時間の中でかき消されてしまいます。しかし私は一生忘れることは出来ません。

私はファロー-四徴症という先天性心臓疾患をもって生まれました。この病気の原因は1つでは説明できないとされています。祖母の被曝が因子の1

つななのか、或いは母が生まれた頃盛んに行われていた大気圏内核実験の降下物の影響はあるのか、ただただ私が運が悪かっただけなのか、それは分かりません。しかし、私がこのような体で生まれてきたことで、私の家族は非常に悲しい思いをしました。このような思いは、たとえ原爆を使った人達であっても、また電力会社のような核産業を推進する人達であっても、決して味わってはならないのです。

とは言え、実は私は、福島第一原発が事故を起こすまで、原発の存在は仕方のないことだと思っていました。原発には原爆と同じ放射性物質があるからあんなものは無い方がいいんだ、でも社会に根付いてしまった原発をなくすのはきっと大変なことで、他にもっと先にやらなきゃいけないことがあるんじゃないか、そう思っていました。

そして、爆発する福島第一原発を見て、自分は何と浅はかだったかと思い知らされました。

原爆と原発では放射性物質の総量が違うことは想像がつかしました。何が起きるのか、どうすればよいのか調べましたが、錯綜する情報に途方に暮れました。まだ自分で上手く体を洗えない子どもを風呂に入れながら、東京の小金井浄水場から放射性ヨウ素が検出されたニュースを思い出し、初めて子ども前で泣きました。

原発事故が起これば、生きるための場所も環境もツールも長期間にわたり失われてしまう、原発をなくすことは私たちにとって後回しに出来ない問題だということを知りました。

私は、私や私の大切な人の心と体を誰からも不当に傷つけられたくありませんし、財産を汚されたくもありません。故郷にまた放射性物質が降ることも耐えられない悲しみです。自分の子どもにも、そのまた子どもにも、自分が泣いてしまったあのときの感情を覚えさせたくありません。

“death fell from the sky” 「空から死が降ってきた」とこのヒロシマの地で演説した人がいます。

これは正しくありません。広島に降った原子爆弾は人が降らせたものです。小金井浄水場に降った放射性ヨウ素も人が降らせたものです。

人が起こす災いは人の手で止めねばなりません。もう2度とこの街に、私達に放射性物質を降らせないで下さい。

安全で平和に暮らし、未来に希望を持っていたい。人として当然の欲求だと信じています。

どうかこの人としての基本的な願いを忘れずに審理を尽くして頂きたい。よろしくお願いします。